明治大学商学部

す

日本史B問題

はじめに，これを読むこと。

（注意事項）

1. この問題用紙は，12ページまである。
2. これは，日本史Bの問題である。解答用紙が出願の時に選択した科目のものであるかどうかを確認のうえ，解答すること。
3. 解答用紙の所定の欄に，必ず氏名を記入すること。
4. 解答用紙には受験番号が印刷されているので，受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
5. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
6. 解答は必ずHBの黒鉛筆を使用すること。
7. 訂正は消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
10. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
11. この問題用紙は必ず持ちかえること。
12. この試験時間は60分である。
13. マークの記入例

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ◍

〔Ⅰ〕 次の文章を読んで，(1)～(5)の【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び，マークしなさい。また，A～Eの空欄に入る最も適切な語句を漢字で解答欄に記入しなさい。

鎌倉幕府の本拠である鎌倉は，現在の神奈川県鎌倉市の中心部に位置していた。当時の鎌倉は，現市域のおおよそ三分の一程度であったと考えられており，三方を丘陵に囲まれ南側に相模湾を臨む扇形の地形をしていたことから，鎌倉城と呼ばれるほど軍事的拠点に適した特徴を有していた。また，その都市づくりに目を転じてみると，鶴岡八幡宮を中心にそこから由比ヶ浜に向けて若宮大路が延びており，前者を内裏，後者を朱雀大路にみたてることで平城京や平安京の都市設計を模したのではないかともいわれている。

鎌倉文化とは，政治の中心がこの鎌倉に移り，本格的な武家政権が誕生した12世紀末から14世紀初めごろまでの文化を総称したものである。この鎌倉文化は，前時代からの公家文化を継承しつつも，武士の素朴で質実な気概をさまざまな形で取り込み，さらには南宋や元といった大陸からの影響も受けていたと考えられている。

まず，宗教の面でいえば，鎌倉仏教と総称されるいくつかの宗派の誕生が見られたことは特筆すべき特徴であろう。例えば，法然を開祖とする浄土宗は，自己に備わった能力を捨て，ただひたすら阿弥陀如来の働きにすがり，その名号である「南無阿弥陀仏」を唱えれば救われるとする専修念仏の教えを説いた。こういった浄土宗の教義は，九条兼実の求めに応じて1198年頃に法然が著した［　A　］などで説かれており，関東の御家人たち，一部の貴族，そして地方の武士・庶民にいたるまで，幅広い層から支持されるようになっていった。また，法然の弟子である親鸞は，悪人正機説を説くことで煩悩の深い人間こそが阿弥陀仏の救いの対象であるとし，この教えが後に浄土真宗として地方武士や農民層に広く支持されていった。なお，この悪人正機説という親鸞の救済思想は，弟子である(1)【①高弁　②慈円　③仙覚　④唯円　⑤叡尊】(生没年不詳)の著『歎異抄(鈔)』の中で述べられている。

このような浄土信仰の流れを汲む宗派とともに，禅宗の流れを汲む宗派も鎌倉

仏教の主役を演じていた。例えば，12 世紀末に南宋から栄西によってもたらされた臨済宗は，鎌倉初期から北条政子など幕府中心人物との結びつきが強く，坐禅のなかで公案問答を行い，悟りに達することを説いている。この栄西が 1198 年に著した [B] は，旧仏教側の禅宗非難に対して戒律の重要性と禅宗の本質を説いた書物であり，『喫茶養生記』などとともに栄西の主要な著書にあげられている。また，臨済宗が公案問答を重視していたのに対し，道元が南宋より伝えた曹洞宗は，同じ禅宗の流れを汲みつつも，坐禅なくしては仏法を体得する手段はないとし，余念を排しただひたすら坐禅に没頭するという只管打坐を説いている。

仮に，鎌倉開創期から 1221 年に起きた⑵【①宝治合戦　②承久の乱　③治承・寿永の乱　④和田合戦　⑤平治の乱】あたりまでを第一期，それ以降から蒙古襲来あたりまでを第二期と区分けするならば，第一期は法然と栄西，第二期は親鸞と道元が鎌倉仏教を主導する代表者であったといえよう。そして，蒙古襲来以後を第三期とするならば，この第三期に活躍したのが [C] (1239～89) と日蓮であった。C は，法然や親鸞と同じ浄土信仰の流れを汲みつつも，善人・悪人や信心の有無を問わず念仏を唱えればすべての人が救われるという教えを説き，その布教には，念仏を唱えながら鐘や太鼓に合わせて踊るという踊念仏を用いた。時宗の開祖として各地を遊行した C は，遊行上人と呼ばれ，その布教の様子は絵巻物などに描かれている。また，日蓮宗の開祖である日蓮は，法華信仰を基礎におき，「南無妙法蓮華経」という七字の題目を唱えることを強調した。1260 年に北条時頼に進呈した⑶【①『教行信証』　②『法華曼荼羅』　③『立正安国論』　④『観心本尊妙』　⑤『神本仏迹説』】の中で，日蓮は，頻発する天変地異や流行病の元凶として念仏を批判している。

このように，鎌倉仏教として出発した新仏教は，教義やそれが展開した時代背景を異にしているものの，共通した特徴を持っている。それは，分かりやすい教義のもとで，行いやすい修行を一つだけ選び，それを専心して励むことを説いているという点である。こういった特徴は，鎌倉仏教が武士や庶民にも広く浸透していき，またその多くが後世に継承されていったことと深くつながっているとい

えよう。

また，鎌倉文化の大きな特徴である武士の文化という点で見ると，鎌倉文化と武士との関連性は，文学や美術のさまざまな側面で見出すことができる。例えば，鎌倉時代は，院政期に記された『将門記』や『陸奥話記』に引き続き，多くの⑷【①説話集　②歴史物語　③軍記物語　④紀行文　⑤随筆】が描かれた時期であった。この中では，実在の武士が作品の題材として生き生きと描かれており，その代表作としては，平家の興亡を記し琵琶法師の平曲を通じて広く普及した『平家物語』や，1156 年に起きた争乱での源為朝の活躍を中心に描いた [D] などがよく知られている。

また，武士の戦いにおける活躍ぶりや日常の暮らしぶりを描いた絵巻物もこの時期に多く見られる。肥後国の御家人である⑸【①加藤景正　②藤原俊成　③三浦義澄　④竹崎季長　⑤岡崎正宗】(1246～？)の蒙古襲来における活躍が描かれた『蒙古襲来絵詞』や，武蔵国の武士である吉見二郎と男衾三郎の兄弟を題材に地方武士の生活を描いている『男衾三郎絵巻』などがその例である。

このように，鎌倉文化においては，武士が文化的作品の素材として広く用いられるようになった。その背景には，この時代の中心的役割を担っているという武士の社会的な立場が反映しているといえよう。

しかし，武士と鎌倉文化の間には，このような文化創作の素材という点でのみ関係があったのではない。武士が文化の創作主体として活躍した時期でもあった。例えば，和歌の領域では，[E] (1192～1219)の私歌集である『金槐和歌集』の作成を皮切りに，和歌集の中に多くの武士の歌が所収されることとなった。このことは，これまでの貴族や僧侶とともに，武士も文化の創作主体として役割を果たしていたということを表しているといえよう。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで，A～Eの【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び，マークしなさい。また，(あ)～(お)の空欄に入る最も適切な語句を解答欄に記入しなさい。

農民たちによる自立的・自治的な村は，南北朝の動乱期に近畿地方とその周辺部に形成され始め，やがて各地に広まっていった。このような村は惣または惣村と呼ばれ，地縁的な関係を軸に農民たちが自らの手でつくり出した村落であった。惣の農民は連帯意識を基調にして，村の行政・宗教行事の運営，農業の共同作業，入会地の山野および灌漑用水の管理などを行った。惣によっては，領主から年貢徴収を請け負い，惣でひとまとめにして領主に年貢を納めるところもあった。それは [(あ)] と呼ばれ，制度として徐々に各地に広がっていった。惣の運営は寄合での協議にしたがって，おとな・沙汰人・番頭などと呼ばれる村の代表者たちによって行われた。神社の祭礼は氏子組織である宮座によって行われたが，この組織は農民たちの結合の基盤となっていた。

強い連帯意識をもって結束していた惣の農民たちは，年貢減免や徳政などを求めて蜂起することがあった。1428(正長元)年の正長の徳政一揆は，A【①越前　②近江　③大和　④河内　⑤摂津】の馬借たちの蜂起を契機とし，京都近郊の惣が結合して徳政を求めて起こした一揆であった。このとき，京都の土倉や酒屋などは襲われ，質物や売買・貸借証文などが奪われた。「日本開闢(かいびゃく)以来，土民蜂起是れ初め也」と『大乗院日記目録』に記されているこの徳政一揆は，その後近畿地方およびその周辺地域にも波及した。また1441(嘉吉元)年，6代将軍足利 [(い)] (1394～1441)が暗殺されその子義勝が7代将軍に就任するにあたって起きた嘉吉の徳政一揆は，この政変に乗じて徳政を要求した一揆であった。これに対処するために幕府は徳政令を発布したが，その後各地で私徳政の展開や徳政令要求を目的に一揆が起きた。この時代，徳政要求以外を主目的とする一揆もあったが，ほとんどの土一揆は徳政を求めて起こされたものであった。

中世の農民は刀などの武器を所有する者も多く，これらの武器は土一揆や一向一揆などにおいて使用され威力を発揮した。豊臣政権下の中心的政策の一つである刀狩は，このような一揆の防止や農民の身分の明確化などを目的としていた。

また，豊臣秀吉が実施したもう一つの中心的政策である検地は，石高制，一地一作人の原則を確立した。これにより，田畑・屋敷地の面積・等級から石高が定められ，一つの土地に対して一人だけが名請人として認められ，名請人には石高に応じて年貢を負担することが義務づけられた。石高は，田畑に等級をつけ，等級ごとにB【①町　②段(反)　③畝　④代　⑤歩】別の標準的収穫高である石盛を決め，石盛に面積を乗じて算出された。年貢の納入については，各人の石高を村ごとに集計した村高に応じて村が一括して納入し，年貢率は一般的に二公C【①八　②六　③五　④四　⑤一】民であった。秀吉はこのような検地を征服した領地で次々に行い，最終的に，天下統一を達成した翌年の1591(天正19)年，全国の大名に対して検地帳と国絵図の提出を命じた。秀吉の実施した一連の検地は，太閤検地または天正の石直しと呼ばれる。

村が江戸時代においても重要な社会単位であったことは言うまでもないが，中世の惣などの分割や新田開発により，17世紀末には村数は6万余にもなったようである。村は農業を主とする農村がほとんどで，それは百姓の家屋敷から成る集落，耕地，山野などから構成されていた。それぞれの村は，庄屋(名主)・組頭・百姓代といった村方三役を中心に運営され，入会地の山野および灌漑用水の管理なども行われた。また，田植え，稲刈り，屋根葺などのように一時に多大な労力が必要とされる場合に，百姓たちは互いに助け合って共同作業を行った。このような共同労働の形態は [(う)] と呼ばれた。

中世の惣においては，村民は神社の氏子組織を紐帯として結合していた。江戸時代において神社の役割はどうなったのであろうか。確かに，禁圧されたキリスト教や日蓮宗不受不施派を信仰させないために実施された寺請制度により，所属する寺院である [(え)] 寺に誰もが登録されることになり，人々の主たる宗教は仏教となった。しかし，神社信仰が消えたわけではなかった。中世同様に江戸時代においても，神社は村単位での信仰の対象であり，五穀豊穣を祈念する祭や収穫を感謝する祭などの祭事は村の神社を中心にして行われた。

幕府や藩は村組織を通じて村民を掌握し，村単位で年貢を徴収した。幕府や藩の財政基盤は農民からの年貢にあったので，農民たちの農業経営の安定化は幕府や藩の収入の安定に繋がった。したがって，如何に農民を統制するかが財政上の

課題となり，田畑永代売買の禁令，分地制限令，田畑勝手作りの禁令などといった数々の農民統制のための法令を幕府は出した。初代将軍徳川家康の頃から，農民は「死なぬ様に生きぬ様に」支配することが江戸幕府の方針であったようである。また，D【①『看羊録』 ②『四書五経倭訓』 ③『民間省要』 ④『本佐録』 ⑤『都鄙問答』】に記されている「百姓は天下の根本なり，是を治るに法あり，（中略）百姓は財の余らぬ様に不足なき様に治る事道なり」（『日本經濟叢書　巻一』より原文を若干修正して引用）という言葉も，この時代の幕府の農民観を示している。

農民の負担には，田畑・屋敷地に対して課せられる本途物成，山野などの用益や産物に関して課せられる小物成などのほかに，国役などの夫役もあった。国役は1国単位で課せられる治水工事などでの夫役である。主要街道周辺には，人馬の不足の際に，それを補うための人馬を出すよう指定されていた村があり，そのような夫役は［　(お)　］役と呼ばれた。このような負担は当時の農民にとって重いものであった。過重な年貢賦課などにより農民の生活が大きく損なわれるようなことがあると，彼らは集団で蜂起することもあった。

江戸時代においては，活発に新田開発が行われ，田畑の面積は拡大した。それに加えて，農業技術の発達によって生産力も拡大した。農具としては，深耕用の備中鍬（びっちゅうぐわ），脱穀用の千歯扱（せんばこき），選別農具である千石篩（せんごくどおし），唐箕（とうみ）などが普及した。また，揚水具として踏車（ふみぐるま）が考案され，それまで使用されていた竜骨車（りゅうこつしゃ）に代わって普及した。さらに，肥料には山野から採る刈敷や人糞が用いられていたが，商品作物栽培には干鰯や油粕などが金肥として購入され利用された。農業技術の普及には，この時代数多く著された農書が大きな役割を果たしており，元禄年間を中心とする前後約10年の頃から，それぞれの地域の特性を反映した農書が各地で著されるようになった。例えば，会津の『会津農書』，加賀のE【①『耕稼春秋』 ②『百姓伝記』 ③『農業全書』 ④『老農夜話』 ⑤『清良記』】は，この時期の代表的な農書の一つである。また，文化・文政期から幕末にかけて，大蔵永常の『農具便利論』が刊行されるなど，多数の農書が著された。

〔Ⅲ〕 次の文章を読んで，(a)〜(e)の【　　】に入る最も適切な語句を①〜⑤から選び，マークしなさい。また，(1)〜(5)の空欄に入る最も適切な語句を解答欄に記入しなさい。

1945年7月のポツダム宣言は(ア)日本軍国主義の駆逐，(イ)平和，安全，正義の秩序が建設されるまでの連合国による日本占領，(ウ)日本国軍隊の完全武装解除と兵士の復員，(エ)日本における言論・宗教・思想の自由および基本的人権の尊重などを内容としたものであった。日本政府はこれを黙殺し，アメリカはこの間に長崎と広島に原爆を投下した。

45年8月15日，日本は敗戦によって連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の占領下におかれた。(a)【①幣原喜重郎　②東久邇宮稔彦　③吉田茂　④近衛文麿　⑤木戸幸一】を首班とする戦後初の内閣は，「一億 [(1)] 」，「国体護持」を唱えて終戦処理に当たった。この年GHQは，陸海軍の完全武装解除，財閥の解体，農地の解放，産業報国会の解散など，一連の民主的な改革に着手した。翌46年には労働組合法が施行され，また女性参加による戦後第1回目の総選挙も実施された。さらに，国際紛争を解決する手段としての武力行使を永久に放棄することを謳った日本国憲法が誕生した。

この新憲法の公布は46年(b)【①4月29日　②5月3日　③10月10日　④11月3日　⑤12月23日】，施行は翌年であった。

いっぽう，国民生活は危機的状況におかれていた。戦後のはげしいインフレーションによって物価は高騰し，主食が遅配したり，欠配するなど飢餓に陥る寸前というありさまであった。また1300万人の失業者が巷にあふれていた。そこで，労働者は企業閉鎖・解雇に反対したり，大幅な賃金引き上げ，職場の民主化，労働組合の承認などを求めて立ち上がった。この時，経営者は敗戦による虚脱状態もあり，生産意欲を欠いていた。そのため労働組合が代わって生産にのり出す事態にもなった。読売新聞社や京成電車などでは，労働組合が経営者に取って代わって編集作業や，売上代金の管理などをおこなう生産管理という争議手段がとられた。このような労働運動の勢いは，労働者の祝日として46年5月1日に戦後第1回目の [(2)] の開催として，また多くの労働組合が結成されて

いった。8月には戦前の右派・中間派の労働組合指導者が中心となって日本労働組合総同盟(総同盟)が，また左派指導者が中心となって [(3)] が結成され，労働組合運動の二大勢力となった。このような労働組合の攻勢は47年はじめにかけてもっとも高揚し，官公庁労働者が中心となって計画した政権打倒などを目指す2月1日のゼネスト決行へ向けて頂点に達した。しかし，ＧＨＱのゼネスト中止指令によって，この労働攻勢は頓挫した。

ＧＨＱの，このゼネスト中止指令にみられる方向転換ともいえる動きは，当時の世界情勢と連動していた。すでに46年3月，イギリス前首相(c)【①アトリー　②サッチャー　③チャーチル　④ウイリス　⑤ウィルソン】は，米英とソ連を両極とする世界の対立を明確にした「鉄のカーテン」演説をおこなった。47年に入ってアメリカも反ソ連・反共産主義の対外政策を鮮明にする。3月には米大統領 [(4)] (1884～1972)が反ソ連・反共産主義の宣言を発表した。さらに6月には，時の米国国務長官が，アメリカ指導のもとにヨーロッパ諸国の経済再建を果たし，事実上共産主義を排除する内容の同長官の名を冠した [(5)] を発表した。米英とソ連を両軸とした冷戦構造のはじまりである。

さきに見た日本国内の占領政策もこのような動きに影響されていた。日本の非軍事化による経済再建から，「共産主義の防壁」としての再建へと舵は切られた。さらに労働運動にたいする規制もその一環としておこなわれた。48年7月ＧＨＱは，公務員は「全体の奉仕者」であるとして，ストライキなどの争議行為を禁止する書簡を日本政府に送り，これを受けて政府は政令201号を公布する。今日につづく公務員の争議権を禁止する法律である。労働側は，これに抗議して，公務員の争議権回復を求めて国際組織である(d)【①ＧＣＣ　②ＧＢＴ　③ＩＮＦ　④ＭＳＡ　⑤ＩＬＯ】に提訴するが，今日に至るも公務員の争議権は回復していない。

1948年から49年にかけて米ソの対立はさらに深刻化する。49年4月には米国のほか英，仏，伊，ベルギー，デンマークなど西ヨーロッパ12ヵ国が，ソ連封じ込めを目的とした集団防衛機構である北大西洋条約機構(ＮＡＴＯ)を結成する。10月には中華人民共和国が成立して，国民党政府は台湾に首都を移すこととなった。このような国際的な緊張の高まりは，ついに50年6月，南北朝鮮を

分ける38度線での戦闘を機に朝鮮戦争へと発展した。朝鮮戦争は，左派的な労働組合運動にたいする攻撃の好機ともなった。朝鮮戦争勃発に前後して，ＧＨＱは共産党や左派労働組合の幹部らを公職などから追放することを指令した。世に言う「レッド・パージ」である。

同年7月，占領軍当局の後押しも受けて(e)【①連合　②全労連　③総評　④同盟　⑤中立労連】が，あらたな労働運動の全国組織として，400万人の労働者を結集し発足した。しかし翌51年の大会では全面講和・中立堅持・軍事基地反対・再軍備反対の「平和四原則」を決定して左翼的に豹変し，この全国組織は，その後しばらく日本の労働組合運動・平和運動を指導することになる。

〔Ⅳ〕 次の文章は，服飾の歴史について記したものであるが，文中の(ア)～(オ)について，【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び，マークしなさい。また，Ａ～Ｅの空欄に入る最も適切な語句を，解答欄に漢字で記入しなさい。

服飾は，色彩，形，装身具などのとり合わせにより，一定の権威や職業を表象する手段としてきわめて便利なものであった。そのため，古来，支配者側の政策・統治手段として頻繁に使用されてきた。また，逆に，それは機能的な進化を追求していく中で，ファッション情報の発信源として，庶民の力強さを表現する一手段ともなった。

現在知られているわが国の服飾についての最古の記述は，三国時代の正史，『三国志』の内，魏書の『烏丸鮮卑東夷伝』の一部，一般にいわゆる［　Ａ　］と呼ばれる文献にある。その記事によれば，男子は大人も子供も身体に入墨を施し，頭は髪を束ね，冠物をせず木綿を巻き，着衣は一枚の布を身にまとって結びとめるだけのものであった。女性は，前髪を上げず，髻（もとどり）を折り曲げて結び，貫頭衣と呼ばれる一枚の布に穴を開けて頭を通したものであったという。［　Ａ　］には，紵麻（ちょま）を栽培し，麻布を生産していたことと同時に，養蚕をなし，絹糸を紡いでいたとあるが，弥生時代には原初的な絹織物が生産されていたと一般に考えられている。ただ，庶民の衣料品における主な材料は，楮，麻の皮をなめして生産

される木綿を織った布であり，朝鮮半島から綿布生産が伝えられ，軌道にのる中世後期～近世初期までは，わが国の服飾の基本素材となっていた。

律令により，官僚機構が国家の根幹となる推古天皇の時代，わが国では最初に明文化された服制，冠位十二階が制定された。『日本書紀』によれば，それは，徳，仁，礼，(ア)【①文　②武　③信　④法　⑤忠】，義，智をそれぞれ大小に分け，十二階とし，「当色」の冠を授けるというものである。「当色」とは一般に，紫，青，赤，黄，白，黒の六色と考えられている。貨幣経済が浸透していないこの時代，布地は，米や塩などとともに有効な交換手段であったことは，律令時代の租税体系，いわゆる租庸調の体系に組み込まれていたことから判断できる。庸は，正丁に10日間，次丁に5日間，政府の命じる［　B　］と呼ばれる都での労役への従事を指したが，実際は，これも調と同様にほとんど布，綿，米，塩などで代納されていたといわれている。

貴族社会では，冠，笏（しゃく）などをつけた束帯，唐衣や裳をつけた十二単などの正装が著名であり，素材は主に絹が用いられていたといわれる。これらは，10世紀以降の国風文化の影響から，唐風の服装を大幅に日本人向けにつくりかえたものとなっており，儀式においてきわめて重要な役割を果たしていた。10歳から15歳前後にかけて，女子はそのとき初めて裳を付ける「裳着（もぎ）」，男子は加冠の儀として烏帽子をかぶせる［　C　］と呼ばれる成年式が行われていたといわれている。

中世，武士が支配を強める中，衣類は機能性を追及して展開する。下の図にあるのは，(イ)【①衣冠　②水干　③直垂　④直衣　⑤狩衣】と呼ばれる下級武士の通常服であるが，上着部分と下袴部分の分離により，運動性が高まり，鎌倉時代以降は，武家全体の通常服として一般化した。

『春日権現験記絵巻(部分，14 世紀頃)』

(『続日本絵巻大成』14，中央公論社)

中世後期から近世初期にかけて，綿布生産が軌道に乗ると，藍，紅花などの商業作物を使用して色とりどりに染め上げた木綿服が庶民の通常服となり，麻の需要は減少した。しかし，中には，技術改良によって，かつての下級品のイメージを覆してブランドを確立し，江戸時代の庶民文化に華を添えた麻織物もあった。越後の(ウ)【①小千谷縮　②丹後縮緬　③久留米絣　④上田紬　⑤有松絞】はその代表的なものの一つである。また，合羽(かっぱ)など，外国の文化を取り入れた新しい衣料品が生まれると同時に，かつては，貴族の下着であった小袖が流行し，それに合わせて羽織，袴，あるいは裃(かみしも)などの着こなしが発達した。それまで富裕な階層を主な対象にしていた服飾販売店も，やがて定価を付けて販売する呉服店へ姿を変え，庶民でもおしゃれを楽しめるようになっていったのもこの時代の特徴である。凡庸な着こなしを打ち破る「かぶき者」も現れ，やがて，歌舞伎役者などが庶民の流行を先導していく自由闊達な庶民の時代を迎えたのである。

絹織物では，京都の絵師，宮崎友禅が友禅染めを考案するなど，大きな技術革新が果たされた。一枚一枚丁寧に染め上げられた京友禅，加賀友禅など，それはまさに，一幅の絵画を身にまとう様となったのである。実際，江戸中期の代表的絵師であり，「紅白梅図屏風」で著名な [D] (1658～1716)なども優美な小袖の製作に力を注いでいたという。ほとんど現在の「きもの」の姿に完成された江戸

時代の服飾は一般に，身体の成長を袷や裾上げで調整できたため，一代のみならず，古着として流通し，さらに寿命が尽きた後も，さまざまな生活資材に再利用可能で，環境への負荷のきわめて小さいシステムであったといわれている。

近代に入ると，洋装が普及するが，その最初の用法は，西洋兵法の移植に伴う軍服であり，やがて，それが警察官，鉄道員や学生・生徒などの制服として普及していった。富国強兵というスローガンのもと，軍服など軍事備品も国産化の必要が叫ばれ，政府は，官営模範工場として㋓【①新町　②愛知　③富岡　④千住　⑤広島】に製絨所を設置し，ラシャやフランネルの国産化を計り，軍服，軍用毛布の供給に当てた。

だが，洋装の庶民への普及は意外に遅れた。条約改正を目的とした欧化政策により，外国人要人などを接待する社交場として1883年，東京日比谷に建てられた［　E　］での夜会，音楽会などで盛んだった洋装も，その流行はごく一部の人々の，それも一時的なものにとどまったといわれている。現在，特別な行事や儀礼の際を除き，日常服のほとんどが洋装化されたとはいえ，㋔【①『和解』　②『その妹』　③『刺青』　④『腕くらべ』　⑤『父帰る』】の著者として有名な永井荷風が，「日本人は洋服着ながら扇子を携へ持ち，人と対談中も絶え間なくパチクリ音をさせる。但し之を見て別に怪しむ者もなきが如し，是日本当代特異の風習なり」(『荷風全集』第16巻，岩波書店)と揶揄したように，その着こなし方は，洋装の生まれ故郷では考えられないような，わが国独自の歴史や伝統が色濃く反映したものとなっていると考えることができよう。